

抑うつ患者の非機能的スキーマとセルフスティグマに関する心理学的研究

著者	下津 咲絵
学位名	博士（臨床心理学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	平成29年度
学位授与番号	30110乙第115号
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064577/

論 文 要 旨

抑うつ患者の非機能的スキーマとセルフスティグマに関する
心理学的研究

平成 29 年度
北海道医療大学大学院心理科学研究科
臨床心理学専攻

下 津 咲 絵

精神疾患患者自身がもつ精神疾患に対するスティグマはセルフスティグマ (self-stigma) と呼ばれ、疾患からの回復に関わる要因に影響を与えることがこれまでに示されている (Livingston & Boyd, 2010)。第1章では、セルフスティグマの歴史や概念を整理し、セルフスティグマと、心理社会的・精神医学的変数との関連を概観した。加えて、セルフスティグマの減少を目指した介入研究の展望を行った。

第2章では、先行研究における問題点を以下のように整理した。①先行研究のモデルからは、セルフスティグマの生じる過程の発端である知覚されたスティグマの重要性が示唆されるが、本邦においては、知覚されたスティグマに特化してセルフスティグマを測定する尺度の整備がなされていない。②セルフスティグマに影響を与える心理社会的・精神医学的変数について明らかとなっていない。③セルフスティグマに影響を与える要因として、非機能的スキーマが指摘されている。しかし、非機能的スキーマのセルフスティグマへの影響については、量的研究を用いて実証的に明らかになっていない。④セルフスティグマに対する効果的な介入は未だ確立されていない。その理由として、セルフスティグマに影響を与える要因が実証的に確認されていないままに、いくつかの技法が複合された介入プログラムが試みられていることが挙げられる。⑤統合失調症以外の疾患や特定の症状をもつ患者に焦点を当てた研究は数少なく、うつ病性障害におけるセルフスティグマの研究が求められる。以上の問題点を解決することを本論文の目的とした。

第3章では、非臨床群・臨床群を対象として、知覚されたスティグマに焦点を当てたセルフスティグマ尺度として広く用いられている、Devaluation-Discrimination Scale (DDS: Link, 1987) 日本語版の信頼性と妥当性を検討した。その結果、DDS 日本語版は原版と同様の12項目1因子構造であることが示された。また、非臨床群・臨床群の双方における本尺度の内的整合性と併存的妥当性が確認された。

第4章では、110名の抑うつ患者を対象に、非機能的スキーマがセルフスティグマに及ぼす影響を検討した。仮説モデルを検証した共分散構造分析の結果から、非機能的スキーマがセルフスティグマに影響することが実証的に明らかにされた。加えて、セルフスティグマが非機能的スキーマと抑うつ症状の媒介要因となることが確認された。つまり、非機能的スキーマが強いことがセルフスティグマ増加につながり、セルフスティグマの増加が抑うつ症状を強めるというメカニズムが示された。

第5章では、50名の抑うつ患者を対象に、非機能的スキーマの改善によるセルフスティグマ減少への影響を検討した。非機能的スキーマの改善を目的として実施した介入は、認知再構成法を中心とした全10回のプログラムであった。介入の事前と事後の評定を分析した結果、非機能的スキーマの有意な改善がみられるとともに、セルフスティグマの減少が示された。加えて、第4章において示されたモデルの適合性について、介入前後の変化量のデータを用いて検討した。その結果、セルフスティグマの減少に対して、非機能的スキーマのうち特に達成動機スキーマの改善が有効であることが確認された。一方で、第4章の結果に反して、非機能的スキーマの改善と抑うつ症状の改善の媒介要因としての、セ

セルフスティグマ減少の影響力はみとめられなかった。つまり、セルフスティグマの減少は抑うつ症状の改善に、即時的には作用しないことが示された。また、自尊感情の回復に対しては、抑うつ症状の改善よりもセルフスティグマの減少がより影響力をもつことが確認された。第5章の結果から、非機能的スキーマの改善に用いられた認知再構成法がセルフスティグマの介入において有効であることが示され、加えて自尊感情回復の重要な手法の一つとなることが示唆された。

第6章では、本論文で得られた結果について総合的に考察し、本論文の臨床的意義について述べた。また、本論文の限界点および今後の課題について議論がなされた。本論文は、抑うつ患者の非機能的スキーマがセルフスティグマに及ぼす影響を実証的に示した。加えて、セルフスティグマの抑うつへの正の影響、および自尊感情への負の影響を明らかにした。セルフスティグマの減少を目指す介入においては、認知再構成法のような、非機能的スキーマを変容させることを目的とした認知的な介入技法が有効であることが示唆された。さらに、自尊感情の回復を目指す際には、セルフスティグマの減少が重要な役割を担うことが示された。